梅鶯仏教壮年会報

第124号
2015年
3月14日

梅鶯仏壮定期総会

三月二十八日（土）
午後五時より

役員会

同日　午後三時より

※本年は翌日に同縁会行事があるため、毎年より一時間早く開催致します。

人間にたべてもらうために
生えている植物はなく、
人間に食べてもらうために
生きている動物もいない。

昨日も　今日も　また明日も
私の生命をささえる食事は、
それらの生命をいただいている。

「いただきます」と掌を合わせ、
「ごちそうさま」と感謝するのは、
この真実に肯く人間の自然な姿だ。

生きている―ということは、
生かされている―ということだ。

寺川幽芳先生「こころの掲示板」より

得度習礼を終えて（後）

法輪寺衆徒　釋勝俊（森勝昭）

毎日五時三十分起床、七時から晨朝勤行、十六時三十分から日没勤行、十九時三十分から就寝勤行、班ごとに内陣出勤（二回から三回）、基本の声明・作法が出来なければ初めからやり直しと、一時間以上の正座がつらかったです。

課題では、浄土真宗の基本的なことだが、なかなか漢字で書けません。

教章（私の歩む道）一字一句間違いがないよう書きなさいとか、七高僧はその順番のお名前や論釈を、そして内陣の荘厳仏具類の名前など苦労しました。

僧侶の任務としては、仏祖に奉仕して、自行化他（自ら修行し、その法をもって他人を教化すること）に専念し、宗門及び本山、所属寺院の護持発展に努めること。

僧侶の心得とは、僧侶の本分を守り、勉学布教を怠らないこと、宗門の秩序を乱さないこと、心豊かな社会の実現に貢献すること、などがあります。

十三日には得度式を迎えることができました。

怒られ、怒られ、恥もかきました。この事はこれからの人生に大きな教えになったと思います。

第二十五代、専如門主様より、本宗僧侶として法名釈勝俊を授かりました。感無量の思いでいっぱいでした。

僧侶とならさせて頂き、これからは僧侶として見られる立場となります。十分気遣いをしていきたいと思います。今まで同様に御同朋御同行として、同じ信仰の道を歩む友として、これからも仏法を学んでいきましょう。

今後もご法義繁盛のために尽力してまいります。

合掌

法輪寺衆徒就任証授与式

題材法話

前号のつづき

風そのものの存在を語るのは大変難しいのですが、風によって揺れる花の姿を見る時、風の存在を伝えることができます。

室町時代の世阿弥が説く「風姿花伝」、風の姿を花が伝えるということです。

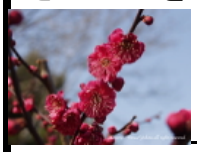
この意味するところは、本物の技や、真実の教えというものは、その技や教えを自体が理屈として伝わっていくというのではなく、その技を極めた人や、その教えによって育てられた人の「姿」によって、その真実性が伝わっていく、ということなのでしょう。

○超一流人の話

どのような世界でも超一流の人の世界はすごいことだと思います。

数年前、ソフトバンクホークス球団会長の王貞治さんと会食し、親しくお話を聞く貴重な機会を得ました。

王さんからいろんな話を聞かせて頂きましたが、王さんが侍ジャパンの初代監督としてWBC（ワールドベースボールクラシック）で優勝された時のイチロー選手の話は非常に興味深くお聞きしました。



それは、侍ジャパンが結成されてから、他の選手が次第にイチロー選手に傾倒していったそうです。

その理由は、イチロー選手から指導を受けたり、アドバイスを受けたりしたからではなく、イチロー選手の野球に取り組む姿を見ていく内に、次第に他の選手が傾倒していったのだそうです。

イチロー選手は必ず集合時間の前に来て、まず自分なりのアップをし、全員そろった時点では常に体の準備ができていたそうです。

また全員揃ってのランニングでは常に先頭を走るのだそうです。これはほんの一例で、すべてにおいて取り組み方に超一流を感じさせ、その姿勢に他の選手が傾注していったということです。

面白い内輪話も聞きました。チームの初招集が2月だったそうで、この時期にはプロ野球選手はまだ体の調整が充分でない、いわゆる体ができていないのが普通だそうです。

ところが、イチローはすでに準備万端で、キャッチボールでも最初からすごい球を投げたのだそうです。

そこでイチロー選手とペアを組んだF選手も負けじと強い球を投げたんだそうですが、やんぬるかな体ができていなかったために肩を壊し、結局WBCにも出られなかったそうです。

イチロー選手は、自らが語るということではなく、その「姿」によってすごさを他の選手に伝えたと言うことです。

○お念仏の相続

余談が長くなりましたが、本物というのは、それに影響を受けたものの姿によって、その真実なるものが伝わっていくということであり、お念仏の世界でも同じことが味わえるのではないでしょうか。

仏教、お念仏の教えは、勿論、お釈迦様の教えを七高僧様や親鸞様によって、論理的に示されているからこそ間違いない教えとして相続されてきました。

けれども、お念仏がただ理屈だけで伝わってきたとすれば、私などの浅学な者にとっては相続のしようがありませんが、実はその中心はお念仏を喜ぶ人の姿によって、長い間連綿と相続されてきたのだと思います。

道綽禅師の言葉に「前に生ずるものは後を導き、後に去かんものは前を訪ひ」とあります。これは「先だった人の導きにより、そして先だった人を偲ぶことによって、念仏の教えが、連綿と受け継がれていく」といった意味合いで、まさに法は人によって伝わっていくと言うことです。

私たちは今、先人の喜びの姿の中で相続されてきたお念仏を悦ばせて頂いているのです。

この悦びがさらに子や孫へと相続されることを願うばかりです。

除夜会住職法話より